

私の昆虫人生を振り返って

たかくわまさとし
高桑正敏（学芸員）

私事ですが、今春に定年を迎え、6年間の学芸部長職から解放されます。この機会に私の歩んできた道を回顧してみると、大きな転換期にはいつも昆虫が関係していました。まさに「昆虫人生」ですが、それをトピックス的に紹介しましょう。いくつかは自慢話になってしまいますが、どうぞご寛容ください。

ハナノミとの出会い

昆虫少年だった私は、中学2年になって初めて小さな甲虫の世界を教えられました。それまでチョウやクワガタなど大型昆虫しか見えていなかったのに、意識して探してみるとふしぎなことに、体長1 cm 以下とか1 mm 程度とかの小さな種類がいくらかでも見つかるのです。すっかり夢中になってしまいました。中でも憧れはハナノミ科の甲虫でした。針状の尻尾（尾節板）をもつ異様に魅かれたのかどうかかわからないのですが、とにかく図鑑を眺めていてハッとしたのです。

そのハナノミとの衝撃的な出会いは、中学3年生のときでした。キンオビハナノミという美しい種類（図1）をコナラの葉上に見つけたのです。とっさに振った網の中には、しかし、いくら目を凝らしてもその姿がないのです。絶望感にさいなまれながら立ち上がると、なんと同じ葉上にその姿が！ 今度こそと、慎重に振った網の中には、しかしまたもや入っていません。信じられない気持ちのまま、何度もその場所を見回っていると、また同じコナラに見つけました！ ようやく毒管に収めたときの気持ちをわかっていただけでしょうか？ そして、なぜ2度も失敗したのか、それはずっと後で知ることになります。



図1 キンオビハナノミと同じ属のヨツモンハナノミ（小笠原：尾園 曉氏撮影）。

しかし当時は、ハナノミへの憧れは現実的ではなく、じっさいの関心はチョウやカミキリムシに向けられました。私が過ごしてきた横浜には、美しいハナノミはキンオビハナノミ1種くらいしか生息していなかったからですし、もっとも憧れたグループ（オビハナノミ属）は西南日本から東洋熱帯に多かったからです。

博物館の学芸員になるまで

私の将来の希望は、地理の高校教師になり、趣味としてカミキリムシを収集することでした。そのため高校2年になると、進路を文系にしました。ところがいざ大学受験となって、初めて自分の愚かさに気がついたのです。家庭の事情もあり国公立しか受けるつもりはなかったのですが、そこでの地理学科はなんとみな理学部に所属していたのです。『地理は社会科の1つだから文系に進んだのに！』と嘆いても、数学IIIを履修していなかった者には理学部受験は無理でした。どこでもいいや、もっとも便利なおとこと選んだのが東京都立大学経済学部でした。

人生はわからないものです。入学した最初の日、クラスの自己紹介で私の前に座っていたSが『チョウが好きなあまり、一浪（ひとなみ）に勉強してしまっただけ』と語ったのです。私の驚きは察していただけたでしょう。Sのおかげで当時活発だった京浜昆虫同好会活動に参加し、学業そっちのけで昆虫三昧の生活を送るようになりました。やがて同好会の運営幹事となり、昆虫界のベストセラーとなる「新しい昆虫採集案内」I～III巻の編集にも加わりました。

全共闘運動の吹き荒れる中、卒業した（させられた？）私は翌年、Sたちと雑誌「月刊むし」（2008年2月現在で444号）を創刊しました。編集技術を磨くために一時ある出版社に就職し、また



図2 憧れの虫の1つだったベニボシカミキリ（西表島：筆者撮影）。

「月刊むし」編集に戻るなど、不安定ながら楽しい生活を謳歌していました。ところが一転して、1978年に神奈川県教育庁文化財保護課の非常勤職員に誘われました。県下一斉の昆虫調査を行うためでした。なんとか学芸員資格を取得して1980年に常勤職員となり、主に天然記念物関係の業務に携わっていましたが、人事異動で1985年に県立博物館へと移り、現在に至っているわけです。

このように振り返ってみると、われながら本当に波乱に富んだ生き方だなあと感じます。

日本産カミキリ大図鑑

京浜昆虫同好会時代からは、カミキリムシ中心に採集に励んできました。その中でとくに印象に残る採集行は、1969年の屋久島、1974年の沖縄八重山諸島、それに1976年の小笠原でした。屋久島では、山頂で薄墨色のヘリウスハナカミキリ（新亜種として学名に初めて私の名がつけられた）を発見し、また当時は珍品として知られていた憧れのオビハナノミ属をいくつも採集することができました。八重山と小笠原では、そのオビハナノミ属をはじめとしたハナノミ類の採集法を会得し、新種を含む多数を得ることができたばかりか、西表島では憧れのベニボシカミキリ（図2）を、また小笠原母島ではミイロトラカミキリ（図3左）という予期せざる新種も採集できたのです。

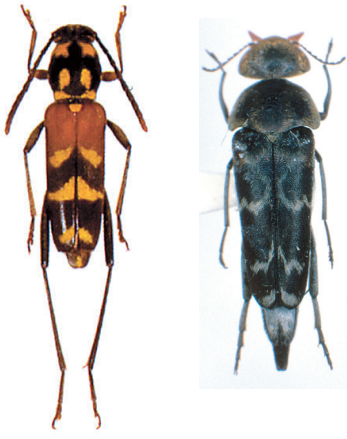


図3 左：学名に筆者の名前がつけられたミイロトラカミキリ（小笠原：日本産カミキリ大図鑑、講談社より）。右：筆者が1977年に初めて新種命名したイリエオビハナノミ（八重山諸島産）。

1977年からは、ハナノミやカミキリムシの新種記載を始めました（図3右）。英語は大の苦手だったところに加え、論文を推敲してくれたのが国立科学博物館の上野俊一博士でした。上野先生はネイティブの原稿すら直してしまうほどきびしいことで有名でしたから、当時の私の悲惨さも想像していただけるでしょう。でもそのおかげで、いつからか他人の原稿を推敲する側になっていますから、恥をかくのも修業のうちだと思います。

1984年には講談社から日本鞘翅目学会編「日本産カミキリ大図鑑」を発行しました。計画したのが1977年でしたから、足かけ8年にわたる事業でした。言い出した私が編集・渉外などの諸用務に加え、図版製作と本文執筆の大部分を担当しましたが、日本産の全種・全変異の標本を集めてそれを再記載し、カラー図版に掲載するというとんでもない計画でした。この事業のおかげで私自身も相当に疲弊したのですが、若かったことでなんとか乗り切れたのだと思います。自慢させてもらうなら、図鑑としての構成から内容まで、いまだ右に出る出版物はないでしょう。

その大図鑑発行後は、私の中からカミキリムシの分類学的な研究意欲が衰退していったのですから、皮肉と言えば皮肉なことです（理由は後ほど）。

生物地理～古伊豆半島説～

なぜか私は、若いときから生物地理を考えるのが好きでした。学生時代から国立科学博物館の故黒沢良彦博士に教え

ていただいていたことが、より拍車をかけてきたように思います。とくに黒沢先生は古伊豆半島成立説には惹かれました。第四紀のある氷期に伊豆諸島は伊豆半島と陸続きにあったはず、という説です。カミキリムシ相から見ても、そう考えるのがもっとも納得が行きますが、もちろん地学研究者には受け入れられません。

県立博物館発行の「神奈川自然誌資料」の創刊号（1980年）に大胆にも私は、巻頭論文「神奈川県の昆虫相の特性とそれを支えてきた要因」を寄稿し、富士火山の大きな影響を指摘するとともに古伊豆半島の成立を想定しました。この論文では、分布していない種類に注目するという逆転の発想で、伊豆箱根欠如要素という概念を提唱し、生物地理思考に一風吹き込んだという自負があります。また、私がその5年後に県立博物館の学芸員になって「神奈川自然誌資料」の編集に関与してきたという運命にも、感慨深いものがあります。

県立博物館時代には、休憩時間やアフターファイブに、違う分野の先輩たちや外部研究者とよく意見を交わしたものです。いま振り返ってみても、それが自分にとって研究の大きな糧となってきたと思います。こうした場合は博物館の最大の長所のはずですが、最近は業務の多忙さや社会的事情からなくなりつつあるのが残念です。

博士論文のテーマ

県立博物館の自然部門が現在の県立生命の星・地球博物館として再スタートしたとき、当時の副館長から博士号を取得するように命じられました。周囲の方々はカミキリムシをテーマにと思ったそうですが、私はあえてオビハナノミ属の1亜属であるハリオオビハナノミ類（図4）の分類学的研究に決めました。先述の



図4 葉上に落ちているシダの胞子を食べるノムヲオビハナノミ（沖縄島：筆者撮影）。

「日本産カミキリ大図鑑」の効果でしょうか、すでに新進のカミキリ研究者たちが育ちつつありましたので、カミキリムシは彼らに任せかけたのです。一方、ハナノミ類は私の手元には多数の標本が集まっていたのですが、日本でも海外でもほとんど研究が進んでいませんでした。どうせ本格的な研究に取り組むのなら、未知の分野の方こそやりがいがあります。

幸いなことに当時、東京農業大学昆虫学研究室の渡辺泰明教授の特別な計らいを得て、博物館に勤務しながら1年間ほど研究生として在籍させてもらうことができました。なんとか農学博士をいただく栄光に恵まれたのも、関係のみなさんのおかげだと感謝しています。ただ農学を（実質的には経済学も）学んでこなかった者としては気恥ずかしく、『不経済学部卒業の無農学博士』と言うのが私の口ぐせです。なお、この研究では分類学的な系統整理と多くの新知見のほかに、シダの胞子が腸内に詰まっていた事実から、成虫がそれを好んで食べる生態を明らかにできました。昆虫のシダ胞子食が確認されたのは、アザミウマの1種に続き、この亜属（のおそらく全種）が2番目のようです。

これからの夢

今春からは、自分のやりたい研究も少しはできるでしょう。いままでに集めた多数の標本を整理するとともに、いま取り組んでいるコブヤハズカミキリ類（図5）の種間関係と分布の動態、神奈川県のカミキリムシ相の集大成、世界のハナノミの分類学的な研究などなど。それにお世話になった博物館に対してはもちろん、昆虫界のお役にも立たなくてははいけませんね。学会のこと、保全のこと、まだまだ老いてはいられないと、心機一転の気持ちです。



図5 ヤマウドの枯れ葉を食べるタニグチコブヤハズカミキリ（山梨県：筆者撮影）。